I-5　岡田昌春文庫（二）　書簡類

町泉寿郎・小曽戸洋・花輪壽彦

［緒言］

岡田文庫（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部寄託・岡田昌春家伝資料）のうち、書籍資料以外の一枚物（書簡・墨蹟・刷物）の整理調査結果を報告する。但し詩箋等の小品は今回対象外とし、続報を期す。

［岡田昌春略伝］

文政十年（一八二七）一月七日、幕府小普請医師丹羽孝徹（堀本彝珍五男）の二男として江戸に出生。一五歳から医学館に出席し多紀元堅・元昕、小島宝素らに従学。一七歳より同館の官費寄宿生。二二歳で幕府奥詰医師岡田昌碩の養子となる。医学館御用（四九寄宿寮頭取、五三世話役手伝介、五四医心方書写御用、六〇世話役手伝）を勤めて、順調に昇進（五一御目見、五八番医師）。維新による静岡移住、家督相続（七〇）を経て東京に戻り（七一）、以後、浅田宗伯らと漢医存続運動や明治天皇皇女の医務に当たった。詩文・医史に通じた。明治三十年（九七）六月十八日没、七一歳。

［概要］

総点数は二七六点。内訳は浅田宗伯が最多の七八点（二八％、書簡六二、詩文一六）。以下、岡田昌春五六点（二〇％、書簡六、詩文四四、筆談六）、石栄安一一点（四％、書簡一一）、岡田昌碩九点（三％、書簡六、詩文三）、今村了庵七点（二・五％、書簡六、詩文一）、高嶋祐啓五点（二％、書簡一、詩文四）、森立之五点（二％、書簡三、詩文二）、呉秀三四点（一・五％、書簡四）、村瀬豆洲四点（一・五％、書簡三、詩文一）、大淵祐之三点（一％、書簡三）、橘諸徳三点（一％、書簡二、詩文一）、中川隆玄三点（一％、書簡三）。浅田恭悦、亀田鶴谷、清川菖軒、周幼梅、前園道、松井操、村山拙軒、山田業広、山本渓愚（以上二点）。浅井国幹、蘆越屠龍、栗本鋤雲、谷其章、柴田元春、越山友仙、高斉単山、服部政世、亀田雲鵬、富士川游、孫君異、陳雨農（以上一点）等の結果を得た。

［時代考証］

上記資料の多くは封筒（即ち消印）を欠くため、或は最初から投函されなかったため、年代不明のものが多く、他の史料を参照した年代の同定が不可欠である。参考資料としては、岡田文庫の書籍資料のほか、『温知医談』『和漢医林新誌』『継興医報』『医談』等の明治期医学雑誌類や浅田宗伯の漢詩文集『栗園余草』（国会図書館鶚軒文庫）が有効である。

［考察］

Ⅰ　岡田昌春の医学者としての側面

①今村了庵らから医学館の生き証人的存在として認知されていた（B一六今村了庵書簡）。

②浅田宗伯はその本草学・物産学の知識を評価していた（B二一・B一二・C四浅田宗伯書簡、C二一岡田昌春書簡）。

③浅田宗伯・山田業広らの借覧に応ずるほど蔵書に富んだ（B六・B七・B八・C一〇浅田宗伯書簡、A一〇〇山田業広書簡）。

④富士川游・呉秀三・藤浪鑑ら新時代の医史学者に和漢伝統医学知識を伝えた（A九三富士川游書簡、D三〇村瀬豆洲書簡、F七・I一九・I二〇呉秀三書簡）。

Ⅱ　岡田昌春の漢方臨床家としての側面

浅田宗伯と協力関係にあり、互いに診断・処方を補いあった。特に明治天皇皇女降誕時には頻繁に宗伯の助言を請うた（A一八・B四・B五・C一・C一〇・C一二・D一浅田宗伯書簡、A三九今村了庵書簡）。

Ⅲ　岡田昌春の文章家としての側面

漢詩文や和歌に通じ、浅田宗伯らと作品を添削・批評しあって雑誌等に発表していた。

Ⅳ　岡田昌春の清人・韓人との交流

清国・朝鮮の医家と医事に関する筆談を交わした（D一二～一八・H二岡田昌春筆談）。

Ⅴ　明治漢方医家の動向

岡田家・森家の養子の件や川越温知分社の件。（A二二・C九浅田宗伯書簡、C三三森立之書簡）。

本稿は文科省科研費特定領域A（2）「江戸のモノづくり」研究の一部である。

（北里研究所東洋医学総合研究所）